

自分の思いを伝え合い、わかり合おうとする児童の育成

～ICTを活用した、少人数・複式学級で教え合い学び合う授業を目指して～

下関市立（豊北）神田小学校

〒759-5331
山口県下関市豊北町神田2519-1

http://shp.edu.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/~h_kanda_s/index.html

1. 研究の背景

本校には、普通学級に在籍し特別な支援を必要とする児童が複数名在籍している。専門機関での教育相談を進めるとともに、関係の保護者と協議や相談会を設けてきた。その協議の過程で、家庭と学校が同歩調で指導・支援していくことをまとめた。

- ① 指示は言葉だけでなく、文字や絵とともにする。
- ② 抽象的な発問・指示ではなく、シンプルで具体的な発問・指示をする。
- ③ やることの手順を最初に示し、見通しをもたせる。

上記の3つの指導・支援の観点は、来年度の完全複式になる本校の避けて通れない授業改善の観点ともとらえている。

このことは、特別な支援を必要とする児童だけでなく、どの子にも分かりやすい授業にするために必要なことだと考えた。特別支援教育の視点で授業を見直すことを全教職員で共通理解を図った。

2. 研究の目的

本校は昨年度、コミュニケーション活動の場をいかに効果的に設定していくかということの研究してきた。その中で、話し合いの根拠となる情報を共有するためにICT機器の活用が有効であることが分かった。また、コミュニケーション活動の場を効果的に設定することにより習熟を図る活動時間の確保ができることが分かった。

また、本校では学力テストや日頃の学習状況の実態から、既習の基礎的・基本的な内容を活用して、相手に分かるように自分の考えを伝える力や問いの内容を理解し、示された条件に従って問題を解決する力を高めることが本校の課題ととらえている。

さらに、本校の全4学級のうち2学級が複式学級であり、来年度は完全複式の学校になることが予想される。特に複式学級においては、間接指導時にもICT機器を活用し、話し合いの根拠となる情報を共有しながら教え合い学び合う学習を展開していくと同時に、習熟を図る活動時間を確保することが先に挙げた本校の課題解決につながると考える。

現在、各学年に教師用PCと拡大提示装置があり、デジタル教科書も使える環境にあるだけでなく、実物投影機などのデジタル機器も備わっている。そこで、このような学習環境を活かしながら本校の課題解決に向けて取り組みたい。

3. 研究仮説

ICTを活用し、授業の流れに沿った学習プリント、間接指導時の学習ガイドを作成し、これらを使って子どもたち自身が教え合い学び合う活動の場を効果的に設定した授業を展開していけば、少人数、複式学級でも自分の思いや考えを伝え合うことに喜びを感じ、お互いに分かり合おうとする態度が育ち、確かな学力の育成につながっていくであろう。

【研究の重点内容】

- ①教え合い学び合う場の設定と子どもたちの手で効果的に進められる学習プリントや学習ガイドの作成と活用
- ②ICT機器、教具（発表ボード）、黒板の効果的な使い分け

4. 研究の方法

- (1) 各学年とも国語と算数のいずれかの授業公開を行い、授業を通して主題の解明を図る。公開授業は1人1回行う。
- (2) ワークショップ型の研究協議を適宜取り入れ、授業改善を図る。
- (3) 児童のつまずきや指導技術の情報交換を毎週の児童理解の会の中で行い、日ごろの授業に生かす。
ここで出た情報を実際に見て共有するために互見授業を行う。また、改善点や課題も記録に残し、研究集録に掲載する。
- (4) 授業研究公開日に外部講師を招聘することで、校内研修の活性化を図る。
- (5) 実践記録や資料などを累積・保管し、来年度の実践に役立てる。
- (6) 年度末に研究集録を作成する。

5. 研究の内容・経過

①ワークショップ型式の研究協議会（6月27日）



ワークショップ型式の研究協議の様子。①複式学級における教え合い学び合う学習②ICT機器の効果的な学習をテーマに協議。事前にメモした付箋を貼り付けながら説明するので、参加意欲が高まる。進行係が関連した付箋を集め意見をまとめ、最後に各担当が明日から行う授業改善について発表する。

②自作デジタル教科書の拡大提示と書き込みで子どもたちが話し合い（7月1日）



3年国語科授業の間接指導（2・3年変則複式の学級で教師は2年生の直接指導をしている。）の場面。自作デジタル教科書を拡大提示し、子どもたちは学習したことをホワイトボードに書き込んでいる。これから、子どもたちだけで話し合い活動が始まる。

③デジタル教科書の必要な部分を拡大し、式や答えは付箋で隠している（9月25日）



1年算数科授業の場面。デジタル教科書の必要な部分だけ拡大した。これまで、多くの時間を費やし説明や書き込みのための拡大コピーをしていた。デジタル教科書を活用することで、浮いた時間を教材研究に使えるようになった。また、注目してもらいたいところに付箋を付けて、興味を引きつけることもできた。

④板書とデジタルコンテンツ画面の使い分け（10月23日）



2年算数科授業の直接指導（2・3年変則複式の学級で3年生は、式の説明をノートにまとめている）の場面。残しておきたい学習の課題や内容のまとめは黒板にまとめ、図や説明はホワイトボードに書き込んだ。間接指導で練習問題を解く活動では、習熟度に応じた練習問題をパソコンで提示した。

⑤ゲームの勝ち負けを既習概念（割合）の活用で判定する（11月28日）



6年算数科授業の場面。あろうことか、ぬいぐるみ取りゲームが途中で故障した。試した回数が違うので、単純に成功した回数だけでは比べることが出来ない。ひとり学びでだれが上手かを考え、グループで説明の方法を発表ボードにまとめた。既習の概念の割合が活用できるかを試す授業を仕組んだ。

⑥チャレンジタイムで暗算練習（11月28日）



これまでの「チャレンジタイム」での練習の成果を発揮する、学期1回の「計算チャレンジカップ」。基準点がクリアできるかどうかを目標としている。各学年のパソコンを集め、全児童35名が一斉に、真剣な表情で学年毎の課題問題にチャレンジしている。

6. 研究の成果

(1) ICT機器活用

①授業の導入場面では

- ・デジタル教科書を使って本時で学習する内容を提示するとともに、より分かりやすく学習の見通しをもてるようなめあてを板書することでその時間に学習することを大まかにつかむことができた。
- ・デジタル教科書を部分拡大して提示したり、段階的に提示したりすることにより、興味・関心や学習への集中力を高め思考を深めることにつながった。

②教え合い学び合う場面では

- ・説明をする場面で、児童がPCを操作してデジタル教科書の必要部分を拡大したり線を引いたりして操作することができるようになった。
- ・根拠となる資料や部分をはっきりさせて、拡大画面を使いながら考えを伝える態度が身に付いてきた。
- ・ホワイトボードをスクリーンとして使用する場面では、書き込みにより考えの根拠が説明できる児童が増えつつある。
- ・書画カメラによりノートやプリントに書いた内容を拡大して見せながら説明する際に顔を上げて聞き手の反応を見ながら話す児童が見られるようになった。

(2) 教え合い学び合う活動

- ・説明する場面では、「・・・ですよねえ。」や「ここまで分かりましたか。」と問いかけで、聞き手の反応を確かめながら学習を進めることが定着しつつある。
- ・ペア学習とグループ学習とでは声の大きさを考えて話し、解決に向けて協力的に活動する児童が見られるようになってきた。
- ・聞き手に質問して、相手の伝えたいことを聞きとろうとする態度がみられるようになってきた。
- ・理解が難しく困っている友だちに助言する場面では、自分の考えが伝わったかどうかを問いかける姿が

見られるようになってきた。

- ・友だちと自分の考えの類似点と相違点に着目して話し合う子どもたちの姿も見られるようになってきた。
- ・複式学級においては、間接指導時に学習リーダーが活動を進めることができるようになってきた。

(3) 前年度の児童の姿と比較して向上したこと

- ・説明することや聞いて理解する活動に積極性が見られるようになってきた。
- ・伝え合う技能や方法を使って、教え合い学び合うことが学習活動の中に定着してきた。
- ・自力解決に向けて、主体的に学ぼうとする態度が身に付きつつある。

7. 今後の課題・来年度めざしたい授業改善

(1) 課題

- ・考えをつなげたり深めたりする話し合いのレベルアップ
- ・ICT 機器と教科書、板書、ワークシートの使い分けによる効率的な授業展開
- ・複式学級における学び合いを深めるための支援のあり方

(2) 来年度めざしたい授業改善

①導入と授業のねらいとのつながりを考えた授業設計

- ・教科書書込み部分の活用（一人学びから全体へ）
- ・課題提示の工夫（効果的な ICT の活用等）
- ・定着をチェックする時間、習熟を図る時間を確保した設計をする。

②考えをつなげたり学びあったりする学び合いの場の工夫

- ・内容を絞り込んで、話し合いの場を意図的に設定する。
- ・身に付けたい学習用語、必要な言語を使う場を作り言語活動の充実を図る。
- ・複式学級における学習リーダーの育成を図る。
- ・復唱する場や別の言い方で説明する場を仕組み、聞く意識を向上させる。

8. おわりに

本年度は、ICT 機器と板書・ワークシートを関連付けて授業改善を行うことができた。また、少人数・複式学級において教え合い学び合う場でどのように支援すれば質の高い学び合いになるかを研究協議会で話し合あうことができた。今後は、複式学級において、よりよい考えをめざした話し合いができる子をどのように育てていくかということに焦点を絞って研修を深めていきたいと考える。